

# 戦闘ないまま餓死・病死5千人

戦死者約300万人の太平洋戦争末期、一度も本格的な戦闘をしないまま、兵士の7割以上、約5千人が命を落とした島がある。ほとんどが餓死か病死だったという。何が生と死を分けたのか？

ノンフィクションライター 友松裕喜



赤道に近い北緯7度東経143度、太平洋のメレヨン島（ウオレアイ環礁は、東西約8キロ、南北約5キロに海抜約3メートルの約16の島が点在している。

久米宏氏が出演していたテレビ朝日「ニュースステーション」のディレクターとして、2001年、私は、「スターナビゲーション・星の航海術」の取材で初めて、この島に渡った。取材が不調に終わり、何もすることがない私の視界に入ってきたのは、「戦争の残骸」である野砲、銃器、壕などが散在する光景だった。本島・フララップ島の中心部には日本人が戦後、

建立した慰霊の鐘「メレヨンの鐘」が設置され、コンクリートの台座には「友よ安らかに眠れ」の銅板が貼られていた。私はこの環礁が「戦地」だったことを初めて知った。鐘の台座の裏には「全国メレヨン会」という組織が建立した旨が明記されていた。

帰国後、『メレヨン島生と死の記録』（朝日新聞社）などの資料を読んだ。戦争中、現在のミクロネシア連邦・ウオレアイ環礁には、約7千人の日本兵が駐留した。そのうち戦没者概数は約4900人に上る（厚生労働省調べ）。

1941年、フララップ島に滑走路の建設が始まった。兵士にとって「太平洋の防人」として守備に就く準備を整える。メ

レヨン島に部隊本隊が上陸したのは、44年4月。3カ月後の7月にサイパン、8月にグアムが玉砕。そのため、それらの南に位置するメレヨン島への米軍の攻撃は皆無になった。加えて日本軍からの食糧補給は、ほぼ完全に止まった。米軍からも日本軍からも「見放された島」がメレヨン島である。

しかし、兵士に食料は必要だ。やせた土地で農作物を作るなど現地自活生活を余儀なくされる。米の支給は制限され、飢餓はその極に達した。さらに風土病のデング熱に加えて、アメーバ赤痢などの併発により、多くの犠牲者が出た。

65年、メレヨン島からの生還者と遺族で構成される「全国メレヨン会」が発足。それ以降、慰霊、

遺骨収集、島民との交流などの活動を行っている。メレヨン島の「戦わないう戦争」を記録したいと願った。「全国メレヨン会」の関係者に電話をかけ、手紙を書き、ファクスを送り、取材を始めた。03年6月には生還者1人、遺族3人とともに、再びメレヨン島に行く機会を得た。遺骨収集、台風災害見舞い、そして慰霊の旅だった。

現地を2度訪ねたライターとして数年をかけて6人の生還者を取材した（現在は5人が故人）。生還者のインタビュで欠かせない質問があった。極限に際した時、「生と死を分けたものは一体何か？」と……。亡くなった方の年齢は取材当時五十音順）

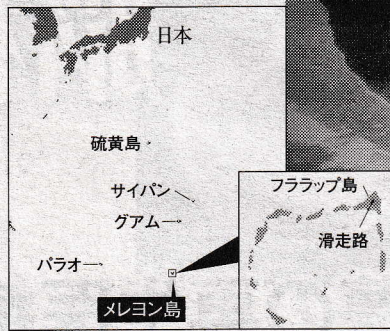
三重県志摩市の石野晋

（左から）日本軍が設営した本島・フララップ島の滑走路＝2003年、友松撮影／戦後初の引き揚げ船で大分・別府港に着いたメレヨン島からの復員兵＝1945年9月／メレヨン島の海岸に残る日本海軍の砲身＝66年、遺骨調査団撮影

# 見放されたメレヨン島

## 何が生死を分けたのか

# 戦後75年、太平洋戦争を書き残す



メレヨン島＝ウオレアイ環礁

さん(77)は運のよさと言った。

「運がよかった。上司に恵まれた。大発(80人ほど乗船可能な船)に乗っていたという運や。食糧不足が深刻化したころ、ようやく潜水艦が入ってきた。大発は潜水艦に積んだ食糧を島に陸揚げする。その時、ワシが乗っていた大発の下に25俵の米を隠した。その後、幕舎の前に野菜やカボチャが植えてあった場所に移動させた。それで助かったな。規則違反はわかっている。良心が痛む? それはな、「役得」や」

福島県白河市の大塚君夫さん(89)は、中国から転戦したことを挙げた。

「中国で少年兵として捕虜を銃剣で殺すところを見せられました。自分にはできないと感じたのです。それが嫌で、ちょうど『潜水艦乗組員希望者』を募っていたので、そこら志願しました。そこが生死の分かれ目です。本当はトラック諸島に行くはずだったのが、なぜかメレヨンに行くことになりました。それも運命の分かれ目で、生と死を分けたことです」

奈良県生駒郡の沖中慶二さん(83)は、ウイスキーのロックを傾けながらこう話した。

「木のほりが得意だった。ヤシの木に実がなっとうでしょ。統制品だったあれを、こっそり夜、取るわけですよ。それを隠して自分の大切な食糧にした。軍隊という組織のなかには目の前で兵隊が死

んでいっても知らん顔をする人もいます。ところが『それではいかん、供養しよう』、そう言って優しい気持ちを持っていた人ほど早く死んだ。死んだ兵隊の墓標を作るために体力を奪われたのかもしれない。メレヨンであった事実を、それがどんなにひどいことであってもさちんと伝えるべきだ。最近この年になって思う。死んだ戦友の心にこたえる道だとね」

## 島の未收容遺骨 今も1850柱

札幌市で今もなおトヨタカローラ札幌の取締役相談役を務める99歳の柿本胤二さんは今年7月の取材で両親への感謝と答えた。

「両親が健康な体で私を生んでくれたことが、まずは生と死を分けたことです。加えて、正直言ってますね、やはり小隊長をや

っていたことが大きく関与しています。畑を作って働いたわけですが、ただ、それを監督する立場で、体力の消耗は少なかつたと言えますね。それとウニなんです。沖のかなり難しいところにウニがたくさんいるんですよ。体力があるもんだから、波に打ち勝ってウニを取ることができるといいます。それをかなり食べていた」

北海道小樽市の平野晴愛さん(83)は、どんなに質問を重ねても、「……」。無言を貫いていた。

千葉県印旛郡の渡辺義尊さん(91)は、キノコで命をつないだという。「腐れたヤシの葉っぱにね、雨が降るとキノコがね、うっそうと生えるのです。みんな怖がつて食べなかつたね。私は食べた。なんともない。そりゃね、名前がわからない。扇を開いたような小さなヤツ。コケのようになって

いるキノコが……」

メレヨン島防衛の最高責任者・北村勝三氏は生還者。彼は全国各地の遺族を訪ねて弔問を続け、1947(昭和22)年8月15日、故郷・長野県の中中で自決している。北村氏の次男・内田崇(たかし)さんから「自決の仕方」を私は耳にした。彼自身に非があつた、という死のメッセージが残されていた。

厚生労働省によれば、メレヨン島の遺骨収集はこれまで10回。收容遺骨概数は3052柱、直近では14年の32柱。未收容遺骨概数は1850柱。遺骨は千鳥ヶ淵戦没者墓苑に納骨されている。

今、私にできるのは「友よ安らかに眠れ」と祈ること。

それにしてもメレヨン島で見た澄んだ青空に浮かぶ入道雲、海の青さ、夜空に輝きを放つ南十字星の美しさが、私の脳裏に焼き付いている。

ともまつ・ひろき ノンフィクションライター、ディレクター。1965年、名古屋市出身。駒澤大学文学部社会学科卒業後、脚本家・倉本聰氏の主宰する富良野塾入塾。テレビディレクターなどを経て現在、フリーランスとして活動。メールmereyon0815@gmail.com